

或作家への報告

—— 王命婦と光源氏 ——

坂 本 信 道

一

かれこれ十年ほど前になるうか。光源氏が藤壺へのなかだちを王命婦に頼むことができたのは、光源氏と王命婦が男女の仲であったからだ、というような趣旨の発言が、テレビから聞こえてきたのは。桐壺帝の女御という立場の女性との密通は、光源氏にとつてもあまりに危険なことであり、それを承知でなかだちを頼めたのは、王命婦という女房に対して絶大な信頼があるはずで、それはとりもなおさず肉体関係があることに由来する、男女間の信頼以外ではありえない、というようなものであった。ふと耳をよぎったきり、番組名も放送日も覚えていないし、発言の正確な文言などまして覚束ないけれど、大意はそのようなものであったと思う。そしてそれは「作家としての勘だ」とあった。「女としての勘」であったならば、男としてはもつともだと納得し、それ以上言葉を挟む余地などないけれど、「作家」でも「女」でもなく、研究者であるわたくしには、なんとかそれを証明する責任があり、それを果たさなければ

ならないように感じられた。したがって、結論は光源氏と王命婦は男女関係にあつたから、藤壺への危険ななかだちを頼めたという、なんだ、ただそれだけか程度の、陳腐とも言えるものであり、新しい発見ということからはほど遠い。しかし、「作家の勘」に導かれれば、おそらく『源氏物語』を読んだほとんどの人が納得するであろう二人の男女関係が、作品中で明瞭に記述されることはただの一度もない。今回は、直接描かれることのなかった光源氏と王命婦の男女関係を、状況証拠を嗅ぎ回ってあぶりだそうという、野暮な試みである。文書が残ってないと当人たちから抗弁されればそれまでという、どこかで聞いたようなやりとりを繰り返しそうだが、はかない追究であるが、「作家としての勘」を研究の側から裏付けることも必要だと思ふのである。

番組での発言は、書き留める間もなくそのまま流れ去ってしまったが、探してみると次のような文章に行き当たった。番組での発言を文字に起こしたものでないので、厳密な意味での正確さを虧くことになるが、とりあえずこの文章から出発することにする。

源氏物語の当時、高貴な女人の部屋に忍びこむのには、女房の助力なしには不可能でした。源氏物語の女三の宮と柏木との密通の場合も、小侍従（女三の宮の乳母子）という女房が二人の仲を取りもつ役をしています。

藤壺の女御には王命婦という女房が、入内の前からお傍に仕えていました。王命婦に源氏が手引きをせがんで、藤壺との密会が果されます。たぶん、はじめての密会では王命婦がすべてのことを運んだでしょう。

この禁じられた恋の手引きをすることは、王命婦にとっても露見すれば身の破滅につながります。それをあえて決行するには、余程の決心がいります。その決心をさせたものには、王命婦の源氏への恋心があつたと思えます。す。

（瀬戸内寂聴「源氏物語と幻の一帖」一三〜一四ページ 講談社文庫『藤壺』所収 二〇〇八年）

なかだちを引き受けた理由を光源氏の側からではなく、王命婦の立場から推測した文章だが、これに続く小説『藤壺』

壺』では、二人が関係を持つ場面を次のように書いています。

王命婦はようやく果ててしまったようでした。真珠も瑪瑙めうも、唐渡りの絹や錦も、手に入れたい香木も、どれ一つ欲しがらぬ女を屈服させるのは、この方法しかなかったのです。事実、体で結ばれてしまえば、どの女もみなどのような要求にも応じてくれるということを源氏の君は覚えました。

(中略)

その替り、はじめての交じわりの後で、源氏の君の手をしっかりと自分の胸に押し当て、眦をさけるほど見開いて、真正面から男君の双の目の中を見据えました。

「ようございませうか。この企ては、人倫の道にも仏の道にも叛そむいた極悪道でございませう。生きて露見すれば只事ではおさまりますまい。万に一つもあの世まで秘密が保たれたなら、無間地獄へ投げこまれますよ。今ならまだ思い返すことが出来ます。いかがなさいませうか」

『藤壺』四〇〇〜四一ページ

物語本文には明確に書かれていない光源氏と王命婦の男女関係を、なかば確信犯的に書き、その両者に藤壺との密通のこの世のみならぬ罪科の重さ認識させている当該場面は、先に挙げた「作家としての勘」に拠った読みであり、解釈ということが出来る。果たしてこの読みや解釈の妥当性を、研究の側からどれだけ『源氏物語』に語らせ、「作家としての勘」がまさに正鵠を射たものであることを、証し立てることが出来るであろうか。

二

王命婦の名が見えるのは、若紫の巻から薄雲の巻の二十三箇所（語としては二十四例）であり、王命婦、命婦の君、あるいは単に命婦と称される。その中に光源氏との男女関係について言及した箇所はひとつとしていない。彼女が初め

て姿を見せるのは次の場面である。

藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり。上のおぼつかながら嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにもまうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現まとはおぼえぬぞわびしきや。(若紫 一―二三〇―二三一ページ)⁽¹⁾

言わずと知れた、光源氏と藤壺の密通が物語で最初に語られる名高い場面であるが、古注釈書を繙いてみても、

王命婦 王は姓なり王姓可考 『紫明抄』 卷二

王命婦 王氏の命婦也又上古は王姓をも給ける也 『河海抄』 卷三⁽²⁾

と姓氏について記すのみで、以下の注釈者たちもこれを継承し、倦むことがない。

加納重文「命婦考」は、命婦の職掌と性格について、

命婦とは、いわば名譽呼称であつて、特別な職掌を持たず、朝廷の儀式・祝宴などの折に参会する、上代宮廷社会における上流社交夫人の謂であつたと言つてよい。⁽³⁾ (「命婦考」一八一ページ)

とした上で、

平安中期に至る時期において、命婦と乳母とが強く結びつく時期があつたことは、確かである。(中略) 王命婦は、藤壺女御の最も側近に位置を占めることは確かだが、それが乳母によるものか古参老練女房のそれであるか、明瞭でない。(中略) 立場としては、先に述べた彰子乳母の大輔命婦と類似して、乳母の性格が思われるのであるが、判然としない。(同前 一八七―一九〇ページ)

とし、命婦の史的変遷と紫式部時代の実相を明らかにし、王命婦の乳母的性格を検討している。今、『源氏物語』に見

える命婦（同名別人含む）を挙げれば、他に「靱負の命婦」「上の命婦」「少将の命婦」「中将の命婦」「兵衛の命婦」「大輔の命婦」「左近の命婦」などである。先行する『うつほ物語』では五例しかなく、藏人や内侍と併記されて宮中での行事の場に登場はするものの、特段の役割を与えられているものはない。『源氏物語』はその点で、命婦の活躍の場が拡大しているという特徴がある。

ちなみに王命婦という人物が登場するのは、物語に限れば『源氏物語』以外では、『我身にたどる姫君』ぐらいのようだ。新帝が三条邸に行幸し、皇太后宮（一品宮）のもとへ忍び入る場面が唯一例である。⁴

さりとて、かゝることこそありつれとて、さごろもの女二のみやのやうに、あせ水にてみえきこえんも、こともをろかなることやありけん、はづかしく心うきを、とにもかくにもいかにせんくと、おぼしめしこがるゝに、さぶらふ人のなかにも王命婦、中納言のすけなど、心しらひ、めしつかふべき心ちもせさせ給はず、はづかしくあさましきには、なか／＼おぼしめしおこして、おきあがりて、御ぞなどもをしやりかくさせ給。⁵

『我身にたどる姫君』巻七 二二〇ページ

悲嘆に暮れ絶望する皇太后宮が、王命婦や中納言典侍のような、気が利いて、こまやかな心遣いのできる女房もいなので、心を奮い立たせ自身で密通の痕跡を片付けようとする。王命婦はあきらかに前掲『源氏物語』若紫の巻からの転用である。場所が三条邸に設定されているのも、光源氏との密会がなされた藤壺の自邸が「藤壺のまかだたまへる三条宮」（紅葉賀 一―三二八ページ）であるためであろう。これ以外に他の物語で王命婦の名前が使われなかった理由は不明としか言いようがない。

話を研究史に戻せば、女房論として王命婦に言及した近代の王命婦研究の嚆矢の一つ、秋山虔「女房たち」⁶や、清水好子『源氏の女君』⁷では、女房としての心情からの読みが出てくるが、光源氏と王命婦の関係ということについて

は、古注時代と状況はあまり変わらず、言及されることはない。たとえば、清水は、

光源氏は慎重である。しかし、誰の助けも借りずに思いは遂げられない。藤壺側近の王命婦という侍女が光源氏に味方する。この人は乳人子ではないらしい。が、王氏（皇族の血筋）で、おそらく、藤壺と血縁関係にあるのであるう、あるじの信頼あつい人である。〔源氏の女君〕一五五ページ）

と王命婦と女主人藤壺の関係を述べた上で、「王命婦の心底には、若く美しい藤壺は若く美しい光源氏と好一对、この二人こそ結ばれるべきである。」（同前 一六四ページ）と、なかだちをした理由を王命婦の心情や美意識の問題と読むにとどまる。いずれにしても、研究の関心は物語の大事である密通にすべて傾き、不義密通という広大な大陸からみれば島嶼にすぎない、粟散辺地の住人であるなかだちをした一介の女房のことなど、顧みられるはずもなかった。物語中に関係を匂わせる一言の行文もなれれば、なおさら、王命婦と光源氏の男女関係を正面から取り上げるなど、研究の常識からして無謀であり無意味だったのであるう。

それでも暴挙に出たくなるのは、これほどの重大事、発覚すれば国家反逆罪に問われかねない秘中の秘を、いくら親しいとはいえ、赤の他人に託せるのかという、あまりに人間的な問題が横たわっているように思われるからである。発端として、他の密通のばあいを見てみよう。

三

王命婦と光源氏の関係を記した行文は皆無であるが、『源氏物語』におけるもうひとつの大きな密通、すなわち、柏木と朱雀院の女三の宮の密通のばあいはどうであろうか。朱雀院による婿選定の段階から女三の宮に対して恋心を抱いていた柏木は、女三の宮が光源氏に降嫁したあとも、その想いを消すことができず機会を窺っている。柏木を女三

の宮のもとへ手引きした小侍従は、次のように物語に登場する。

衛門督みものかむの君（＝柏木）も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば、この宮（＝女三の宮）を父帝（＝朱雀院）のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなどくはしく見たてまつりおきて、さまさまの御定めありしころほひより聞こえ寄り、院にもめざましとは思しのためはせずと聞きしを、かく異さまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず。そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。「対の上（＝紫の上）の御けはひには、（女三の宮は）なほ庄おされたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせたまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめ、と常にこの小侍従といふ御乳主ちめしをも、言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿おとどの君（＝光源氏）もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。

（若菜上 四―一三五―一三六ページ）

降嫁後の女三の宮が紫の上に圧倒されているという噂を耳にして、心中穏やかでない柏木は、光源氏が出家を遂げたならばその後釜になどと不遜にも考えているが、婿選定のころから「語らひつきにける女房」が小侍従であり、現在も「小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまし」ていると言う。「語らひつく」は、

侍従も、かの大弐の甥ほかだつ人語らひつきて、とどむべくもあらざりければ、心より外ほかに出で立ちて（後略）。

（蓬生 二―二三三―三五ページ）

などからもわかるように、男女の仲となることを意味する。ここでは、末摘花の女房侍従がこれまで仕えてきた末摘花を都に残し、筑紫へ出発することになった理由が、大弐の甥との結婚であったというのである。柏木は男女関係を結んだ小侍従から情報を得、「言ひはげまして（＝責めたてて）」、ついには女三の宮との密通にいたる。前掲若紫の巻

の「暮るれば王命婦を責め歩きたまふ」光源氏の王命婦に対する言動と類等しきことに留意すべきであろう。この王命婦と小侍従との言動の類同性は、王命婦と光源氏が男女関係にあったことを類推させる、かすかな光芒のひとつと考えられよう。

柏木と小侍従が男女関係にあることは、ほかに、「小侍従といふかたらひ人」（若菜下 四―二二七ページ）とあることから明らかである。浮舟を「重りかななる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人」（蜻蛉 六―二六〇―二六一ページ）にしようと思つていたという薫の述懐などもその証左とすることができる。

このように、『源氏物語』において物語としては藤壺との密通に次ぐ重さを持つ柏木と女三の宮との密通（光源氏にとつては因果応報という意味で軽重はないのかもしれないが）で、決して漏れてはならぬ機密を、禁を犯す側の柏木が託したのは、小侍従という自分と男女の関係にあった女房であつた。もちろん、小侍従の母である侍従の乳母は女三の宮の乳母だから、乳母の子として小侍従が女三の宮の側近にあつて信頼を得ていたことは、手引きを依頼する前提としてあるに違いない——同時に侍従の乳母が柏木の乳母の妹であることも、柏木が小侍従を信頼するよすがのひとつには違いない——が、何にもまして、男女関係を結んでいた女だということは見逃せないように思われる。

ただに語らふ男、なほこの世の思ひ出でにすばかりとなんおもふ、といひたるに、

かたらふにかひもなければおほかたは忘れなむとぞいふとこそみれ
『和泉式部統集』五〇九^⑩

「語らひつき」た関係と「ただに語らふ」関係では、その信頼感に計測不能な差——質量ともに——があるというべきであろう。

それでは『源氏物語』において、なかだちをする女房のすべてが、その依頼してくる男君と関係を持っているのかと言え、必ずしもそういうわけではない。光源氏を末摘花のもとに導く大輔の命婦と、匂宮と浮舟を取り持つ侍従について見てみよう。

大輔の命婦の末摘花の巻での活躍はなかなかのものである。端役の女房ながら、その名を十七回物語にとどめてい。ただし、それ以外の巻には登場しない局所的な存在である。

左衛門の乳母とて、大弐のさしつぎに（光源氏が）^{おほ}思いたるがむすめ、大輔命婦とて、内裏にさぶらふ、わかむどほりの兵部大輔なるむすめなりけり。いといたう色好める若人にてありけるを、君も召し使ひなどしたまふ。

（末摘花 一―二六六ページ）

光源氏の乳母である左衛門の乳母の娘であるという大輔の命婦（父は皇統に連なる血筋の兵部の大輔）は、宮中に出仕しており、「いといたう色好める若人」であるという。また、光源氏が末摘花と関係を持つことになったとしても、「仮にもおはし通はむを咎めたまふべき人なしなど、あだめきたるはやり心はうち思ひて」（末摘花 一―二七九ページ）父兵部の大輔にも報告しなかったという人物である。通常こうした「あだめきたるはやり心」を持つなどの表現がある女房は、光源氏と何らかの交渉を持つていそうな予感があるのであるが、意外なことに、物語はそれを否定する。光源氏からすれば恋愛めいた方面のわずらわしさがなく、気安い関係だ、という。

年も暮れぬ。内裏の宿直所におはしますに、大輔命婦参れり。御梳櫛^{けりぐし}などには、懸想^{けんそう}たつ筋なく心やすきもの、さすがにのたまひ戯れなどして、使ひ馴らしたまへれば、召しなき時も、聞こゆべきことあるをりは参上^{まきのぼ}りけり。

大輔の命婦が、このように光源氏と色恋において無関係な人物設定になつてゐる理由の考察はひとまず措き、続いて侍従について見てみよう。

周知のごとく、薫が宇治に隠し据えていた浮舟に関心を抱いた匂宮は、浮舟と契るべく策を巡らすのであるが、その際、なかだちとなつて匂宮を浮舟のもとへ導き入れるのが、この侍従という浮舟付きの女房である。浮舟が思ひのほかには匂宮と関係を結んだ直後、

侍従も、いとめやすき若人なりけり。これさへかかるを残りなう見るよと、女君(≡浮舟)はいみじと思ふ。宮(≡匂宮)も、「これはまた誰たぞ。わが名もらすなよ」と口かためたまふを、いとめでたしと思ひきこえたり。

(浮舟 六一—一五二—一五三ページ)

とあるように、「めやすき若人」である侍従は、女主人と匂宮の関係を取り持ったことに自責の念を感じるところか、逆に匂宮を「いとめでたしと思ひきこえたり」とその美質を称賛する。密会の最中も、「侍従、色めかしき若人の心地に、いとをかしと思ひて」(浮舟 六一—一五三ページ)という有様である。匂宮と侍従が男女関係にないことは、「この大夫(≡匂宮従者時方)とぞ物語して暮らしける」(同前)とあることから窺える。主人どうしの逢瀬の間、その従者の男女のむつび合ひも同時にほめかされるというのは物語読者御存じの書法であるから、おそらくここもそのように理解すべきであろう。侍従が関係を持つてゐるのは、匂宮の従者時方である。侍従も、匂宮と浮舟という禁忌の関係のなかだちを託されながら、匂宮とは関係を持たない女房である。¹¹⁾

このように、大輔の命婦と侍従という密通の媒介者には、いずれも依頼する男君との男女関係が設定されていない。先に述べた王命婦や小侍従との違いはそこにあるわけだが、その理由は、その密通の禁忌の度合いの違いというに尽

きよう。もちろん、光源氏と末摘花、匂宮と浮舟の関係においても倫理的な意味で禁忌は存在するが、「物語的」禁忌の観点から光源氏と藤壺、柏木と女三の宮のばあいと比較すれば、そこには絶対的ともいいうべき差がある。いわば前者は「わたくしごとの秘事」に過ぎないのであって、そこで厳封されるべき秘密の重さは、後者の国家的あるいは政治的な緊張関係の中での秘事——「おほやけごとの秘事」——とはまったく異なると言つてよい。その禁忌の差異こそが、なかだちする女と依頼する男との男女関係による絶対的信頼というかたちで顕在化しているのではなからうか。柏木と女三の宮の密通をなかだちする小侍従と依頼する柏木が男女の関係にあることは、それ以上に厳然と秘されるべき光源氏と藤壺の密通において、光源氏と王命婦にそのような関係を物語が求めたとしても不思議はない。

五

臣下と後の密通は『伊勢物語』に端を発し、『源氏物語』にいたつて初めて物語の骨格として構築された、**壮絶な禁忌**を孕んだ構想なので、そこに見られるなかだちする女との関係を先行する物語に捜しても、その例は多くない。『伊勢物語』にはそうした女房によるなかだちの話はなく、『うつほ物語』に次のようなものがわずかに見られるにすぎない。

仲忠、「あて宮」に、いかで聞こえつかむ」と思ふ心ありて、かく来歩くになむありける。さて、おのづから殿人になりて、御達などに物言ひ懸けなどする中に、**孫王の君とて、よき若人、あて宮の御方に候ふにつきて、この思ふことをほのめかし言へど、つれなくのみいらへつつあるに、さてのみは、えあるまじければ、面白き萩を折りて、葉に、かく書きつく。**

主人公仲忠が「孫王の君」というあて宮付きの女房に「つきて」、すなわち男女関係を持ち、その後、あて宮へのなか

だちとする。仲忠と孫王の君が男女關係にあつたことは、後の、

この孫王そんわうの君きみの母は、帥すいの君、優ゆうにいますがりて、この源中納言殿げんちゆうなごんけん（＝源涼）の渡り給ひぬるをとなして、いとどかしこうおはす。娘みたりは三人、大君おほいこれ（＝藤壺付き孫王の君）、中の君は大將殿だいしやうけんの孫王（＝仲忠妻女一ついでの宮付き）、三の君は源中納言殿げんちゆうなごんけんの孫王（＝涼妻さま宮付き）。この御方の、昔、かたちなどよくて、髪かみ丈だけにあまりて、ものものしう清げなる人の、心憎く、心あるなり。右大將みぎだいしやう（＝仲忠）、昔、思ひて語らひしかば、それをのみ思ひて、よき人・君達きんだちのためへど、耳にも聞き入れず、君の御身に添そひて、御前みづかみ片時かたとき離さらであり。

（国讓・上 六五八ページ）

なる記事によつても判然とする。二人の關係が生じたのは、まだあて宮求婚譚のさなかであり、東宮入内という結末を迎える前なので、あて宮への手引きを頼むことにそれほど重大な禁忌は存在しないのであるが、むしろ、男が懸想する相手だけでなく、手引する女とも關係を持つことがそれほど特異なことではなかつたことを示す例と捉えるべきである。

同じくあて宮求婚譚の中で、求婚者のひとり源実忠が、あて宮の乳母子兵衛の君と關係を持って、あて宮へのなかだちとする例がある。⁽¹⁵⁾

あて宮の御乳母子、かたちも清げに、心ばへある人、兵衛へいゑの君とて候ふに（実忠は）語らひつき給ひて（後略）。

（藤原の君 七〇ページ）

後の回想に拠れば、その時、実忠は「度々、『ただ御文一行を見給へむ』と、兵衛を責め」（国讓・上 六七九ページ）たとあり、なかだちが責められるのは、光源氏と王命婦の「暮るれば王命婦を責め歩きたまふ」（若紫の巻）という關係と相似形をなしている。

それ以外は、いずれも金品を報酬にしての依頼である。あて宮に懸想する三春高基は、宮内の君（あて宮付き女房）に「大きな衣箱二つに、麗しき絹・畳綿など入れて」（藤原の君 九〇ページ）なかだちを促す。また、朱雀帝への女二の宮をめぐっては、蔵人の少將近澄や宰相の中將祐澄が、

この君たちは、皆御達につきて、物を取らせつつ、「盗ませ奉れ」とのたまふもあり。蔵人の少將、中納言の君とて、御身につき仕まつる人に、よろづの宝物を取らせ給ひつつ、「盗人に入れよ」とのたまへど、さるべき折もなし。

（国譲・中 七二三ページ）

「いと恐ろしきことをこそ聞き侍りつれ。二の宮の越後の乳母は、『宰相の中將に盗ませ奉らむ』とたばかりて、多くの物賜はりにけるは。」

（国譲・下 八二五ページ）

などと近侍の女房や乳母を籠絡しようと画策する例が挙げられる。『源氏物語』はこうした金品による仲介依頼を描かない。男女関係がないことが明らかな女房のばあいでも、仲介する動機は、恋愛への好き心や、依頼してくる男君への崇敬・称賛に拠っている点、『うつほ物語』とは異質と言うことができる。いわゆる源氏物語固有の「もののあはれ」の観点に立つてなかだちが描かれているというべきであろう。光源氏と王命婦に男女関係を想定したくなるのは、『源氏物語』のこうした性格にも関わっているように思われる。

それはともかくも、『うつほ物語』では、仲忠のあて宮へのなかだちをするのは孫王の君であり、仲忠と孫王の君には男女関係があった。孫王の君と『源氏物語』の王命婦が、ともに天皇家につながることを意味する女房名を与えられていることと、『うつほ物語』のあて宮が入内後「藤壺」であることを考え併せると、『源氏物語』の光源氏と藤壺の密通が、仲忠とあて宮の懸想の物語の相似形として構想されていることを窺わせ興味深い。とするならば、その構想の相似は、なかだちを勤める王命婦が、仲忠と孫王の君が男女関係にあったと同様、光源氏と男女関係にあったこ

とを類推させる徴証の一つとなり得るであろう。

六

光源氏と王命婦の關係の指標として、和歌の贈答について検討してみよう。『源氏物語』において、情趣の凝縮されたひとつの頂点として和歌は配されており、さほどでもない身分とされる女房たちにとって、主人公光源氏との贈答歌の存在は、少なからず特別な意味を持つと考えられる。王命婦の詠歌は三首あるが、光源氏、兵部卿の宮との唱和歌（賢木の巻）、須磨下向を前にした光源氏への幼少の東宮の離別の歌の代詠（須磨の巻）なので、光源氏との贈答歌は次の一首のみである。

「いかならむ世に、人づてならで聞こえさせむ」とて、泣いたまふさまぞ心苦しき。

「いかさまに昔むすべる契りにてこの世にかかる中のへだてぞ

かかることこそ心得がたけれ」とのたまふ。命婦も、宮の思ほしたるさまなどを見たてまつるに、えはしたなうもさし放ちきこえず。

「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや世の人のまどふてふ闇

あはれに心ゆるびなき御事どもかな」と忍びて聞こえけり。

（紅葉賀 一―三二七ページ）

藤壺との再度の逢瀬のかわぬ光源氏の悲嘆の贈歌とそれを慰撫する王命婦の答歌であり、たしかに、ここには懸想めいた内容、光源氏と王命婦の男女關係をほめかすような要素は見当たらないと言える。

当然のことながら、光源氏との贈答歌がある女房はそれほど多くない。女房の基準の取り方によって若干の差はあろうが、こころみに示せば、侍従の君（末摘花の乳母子で、光源氏への末摘花の代詠二首）、宣旨の君（明石の姫君の

乳母として明石に下る折の、離別の贈答一首)の二人がまず一つの範疇として挙げられようか。彼女らが詠むのは、代詠や離別歌という、男女の仲とは無縁の内容の歌であり、光源氏と男女の関係になく、今回の王命婦の問題とは関わらない。

それに対し、もう一つの範疇に属するのは、中将のおもと(六条御息所付きの女房)、中将の君(光源氏付きの女房)で、光源氏と懸想めいた関係、もしくは男女の関係にある女房。中将のおもと(中将の君とも呼ばれる)は、六条御息所のもとを早旦に辞す光源氏を見送る途中、「折らで過ぎうきけさの朝顔」と詠みかけ「手をとらへ」た光源氏に対し、「いと馴れて、とく、(和歌略)と公事おほやけごとにぞ聞こえなす」(夕顔 一一一四八ページ)と応じた洒落者である。中将の君は、「光源氏は) 御方に渡りたまひて、中将の君といふに、御足などまありすさびて大殿籠りぬ」(葵 二一六九ページ)と早くから源氏との男女関係が知られる女房で、その後、幻の巻においても、「中納言の君、中将の君など、御前近くて御物語聞こゆ」(幻 四一五二四ページ)、「一人ばかりは思し放たぬ」(幻 四一五三九ページ)と光源氏と関係を持ち続ける。光源氏との贈答歌はその幻の巻にあり、「あふひはなほやつみをかすべき」と、光源氏が色めいた懸想心のある答歌を詠むことで、中将の君との男女の関係がほのめかされる。

このように、光源氏と贈答歌、ことに恋愛すじの和歌のやりとりが描かれた第二の範疇に属する女房は、光源氏と男女関係にある。王命婦と光源氏の贈答歌、とりわけ藤壺に逢えぬ恋の嘆きを詠んだ紅葉賀の贈答歌は、この第二の範疇の女房たちのそれに近いということができよう。また、宮中に勤める女官である源典侍は、厳密な意味ではこれまで検討してきた女房とは性格を異にするものであるが、光源氏との歌の贈答は五つの場面六首に及び、贈答歌の有無しが光源氏と女房との男女関係の有無と関わることの補説となりそうなのである。

なお、薫に関して付言すれば、按察使の君(女三の宮付きの女房)が「按察使の君とて、人よりはすこし思ひまし

たまへるが局におはして、その夜は明かしたまひつ（宿木 五―四一八ページ）、小宰相の君（今上帝女一の宮付きの女房）が「からうじていと忍びて語らひたまふ小宰相の君」（蜻蛉 六―二四五ページ）と、それぞれ薫と男女の關係にあり、女房ながら贈答歌が一首ずつあることも注目される。¹⁷⁾

七

周知のごとく、光源氏には、すでに触れた「中將のおもと」（六条御息所付きの女房）、「中將の君」（光源氏付きの女房）のほかにも、いわゆる召人¹⁸⁾と呼ばれる男女關係にある女房がいる。右大臣家の頭中將にはなびかず、

中將の君、わざと琵琶は弾けど、頭の君心かけたるをもて離れて、ただこのたまさかなる御気色のなつかしきをばえ背ききこえぬに、おのづから隠れなくて、大宮などもよろしからず思しなりたれば、もの思はしくはしたなき心地して、すさまじげに寄り臥したり。絶えて見たてまつらぬ所にかけ離れなむも、さすがに心細く思ひ乱れたり。
（未摘花 一―二七四ページ）

とひたすら光源氏だけに心を寄せる葵の上付き女房「中將の君」や、

中納言の君といふは、年ごろ忍び思ししかど、この御思ひのほどは、なかなかさやうなる筋にもかけたまはず。あはれなる御心かなと見たてまつる。おほかたには、なつかしうち語らひたまひて（後略）。

（葵 二―五九ページ）

長年にわたつて光源氏と關係があり、葵の上の喪中には懸想だつすじで接してこない光源氏を称賛する、これも同じく葵上付き女房「中納言の君」。あるいはまた、光源氏自身に仕えている女房では、

わが御方の中將、中將などやうの人々、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ（後略）。

そつけない光源氏の態度ながらも、わずかにでも顔を見ることのできていたこれまでは慰められていたのに、光源氏が須磨へ下向したのちはどうすればよいのかと悲嘆する「中務」「中将」などである。

端役だから個々の人物造型の書き分けに乏しいのは仕方ないと言えればそれまでなのだが、いったい誰がどこに仕える女房であるのか、どの中将の君、どの中務の君、どの中納言の君が同一人物であり、あるいはまた別人であるのか、弁別に戸惑うばかりではないか。紛らわしいことこの上ない。しかし、ここで注意すべきは、あまたある女房名の中から、光源氏と男女関係にあった女房の名前は、別人であっても同一の女房名が、なかば固定的に使用されているという点である。具体的に言えば、中将の君、中務の君、中納言の君といった女房名は、そのすべてがそうではないにせよ、光源氏と男女関係にある女房だということを匂わせる名ではなかったか、ということである。『うつほ物語』では孫王の君（仲忠の召人）、兵衛の君（実忠の召人）などであった召人の女房名が、少なくとも光源氏に限っては特定の名前に集約・固定され、イメージを作り出していると言うことができよう。¹⁹⁾

以上のような女房名の水脈の中に、紅葉賀の巻の次の箇所を置いてみると、どう見えてくるであろうか。藤壺の、自邸三条の宮への退出を知った光源氏が訪問して来る場面である。

藤壺のまかでたまへる三条宮に、御ありさまもゆかしうて、参りたまへれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人々対面したり。けざやかにももてなしたまふかなとやすからず思へど、しづめて、おほかたの御物語聞こえたまふほどに、兵部卿宮参りたまへり。

(紅葉賀 一―三二八ページ)

実はこの場面の「中納言の君」「中務」はいずれも藤壺付きの女房であつて、先に源氏と男女関係にある女房として取り上げた同名の女房とは別人物である。物語のどこを捜しても、藤壺付きの彼女らが光源氏と関係を持っていたと

いうことは描かれていない。すなわち、今般問題としている「命婦（＝王命婦）」ともども、この場の三人の女房は光源氏との関係は不明なのである。にもかからず、「おほかたの御物語聞こえたまふほど」という場に伺候して光源氏にも親近する「中納言の君」「中務」などの女房が、光源氏との男女関係を匂わせるのは、彼女らの女房名が負っているイメージからに他ならない。前掲葵の巻では、葵上亡き今、男女関係を求めて来ない光源氏は、長い間男女関係にある葵上付き女房「中納言の君」と、「おほかたには、なつかしうち語らひたまひて」（葵 二―五九ページ）いたではないか。紅葉賀の巻の当該場面、藤壺に近侍する三人の女房のうちのひとりとして名の挙げられた王命婦、その彼女と光源氏との男女関係については、「中納言の君」「中務」といういかにもそれらしい名、召人に頻用される女房名が、偶然なのか、はたまた意図あつてなのか、作者によつてここに併記されているということからしか、その実否を推測できない。というよりも、召人らしい女房名とともに挙げられたこの場の王命婦について、光源氏との男女関係についての野暮な臆測は、『源氏物語』の行文に即す限り、ここまでしかできないということである。

光源氏にとつて、永きにわたつて願ひ続け、ようやく遂げられた藤壺との逢瀬は人生最大の宿願の実現であり、その困難な、国家反逆罪にも当たる危険極まりない行為のなかだちをした王命婦の働きは、通常ならばいかなる寄り辺もなく、誰も手助けするはずのない密通を遂げさせた、光源氏にはまさ天佑というべきものだったと言える。そうした重大事を頼む光源氏と、自分のすべてを賭してそれを実現させようとする王命婦の絶大な信頼関係が生じ得たのは、果たして二人の間に男女関係があつたからなのか。『源氏物語』本文そのものには何の記述もない中で、柏木と女三の宮の密通においてなかだちを勤めた小侍従と柏木の男女関係との相似性、あるいはまた、『うつほ物語』の仲忠とあて宮をめぐつての孫王の君と仲忠の男女関係の相似性、さらには中納言の君、中務の君、中将の君といった『源氏物語』において主人と男女関係にあるというイメージを負わされた女房名の検討を通して、光源氏と王命婦が男女関係にあつ

たことを詮索してきた。所期の目的であった外堀を埋めることすら達成は覚束ないが、はじめに述べたように、物語の中を捜せばとりあえずこの程度は、二人の仲を勘繰ることができるといふ報告である。後はまた、千年の時を隔てて作品を創り出した二人の作家の語るところ——その作家としての勘や思惑、すなわち作品の潜在的な人物関係の構造に委ねるしかないであろう。研究の側から迫ることができるのは、この問題に関しては、目下ここまでである。

注

- (1) 『源氏物語』の引用は、小学館新編日本古典文学全集に拠り、巻名、巻数、ページを記した。必要に応じて()内に必要な語句を補い、場面把握の一助とした。ルビは適宜省略した。以下、同じ。
- (2) 『紫明抄』『河海抄』の引用は、玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』(角川書店 一九六八年)に拠る。
- (3) 山中裕編『平安時代の歴史と文学 文学編』(吉川弘文館 一九八一年)所収。
- (4) 東京大学史料編纂所の古記録データベースで検索しても、『貞信公記』天慶九年(九四六)十二月三十日条の「中使頭朝臣来、有朝拜襄帳、無王命婦一人、代□「申力」臣命婦何」が知られるのみ。
- (5) 『我身にたどる姫君』の引用は、鎌倉時代物語集成第七卷(笠間書院 一九九四年)に拠る。この箇所は王命婦が『源氏物語』の王命婦を指すこと、中納言典侍が『狭衣物語』で狭衣大将と女二の宮のなかたちをした中納言典侍であることは、片岡利博校訂・訳注『我が身にたどる姫君』下(中世王朝物語全集21 笠間書院 二〇一〇年)の注に指摘がある。文意についても同書からは多くの教示を得た。
- (6) 秋山虔「女房たち」(鑑賞日本古典文学第9巻 『源氏物語』所収 角川書店 一九七五年)は、王命婦について、「王命婦の心は詳細に、その置かれた位地にふさわしい的確さをもって描き出されているといつてよい」(四五四ページ)とする。『源氏

物語』に見える女房の数について、「ざっと数え上げたところ八十人ほど」（四五〇ページ）という。稲賀敬二「女房」は、王命婦について、「源氏への同情の念は消えたわけではなく」と述べるのみ。また、和田英松『官職要解』をあげたうえで、「禁中に仕える女房は、御匣殿、尚侍、および二位・三位の典侍で禁色を許されたもの、大臣の娘などは上臈であり、撰閲家の家司の娘などは下臈、侍臣の娘や命婦などは中臈ということになっている」と定義している。（『国文学』第十六卷第七号 学燈社 一九七一年六月）。引用は、『源氏物語』とその享受資料 稲賀敬二コレクション³（笠間書院 二〇〇七年）に拠る。

(7) 清水好子『源氏の女君』（塙新書 一九六七年）。

(8) 加藤宏文「王命婦から小侍従へ——「かくろへごと」展開の視点——」（森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社 一九九三年）に、「この二つには、いわゆる「場面の転用」の関係が、見て取れる。（中略）前者（稿者注 藤壺と光源氏）での宮付きの王命婦が、後者での宮の乳母子（柏木にとっても、乳母の姪）小侍従に見合う。」（五九三ページ）との指摘がある。なお、ここで言及されている「場面の転用」は、稲賀敬二が「こうして紫式部は「光源氏」物語では使わなかった「輝く日の宮」物語の一場面を、そのまま柏木・女三宮事件の中に生かす」と長編を書き進めるにあたっての構想の転用があることを想定し、光源氏と藤壺の密通と、柏木と女三の宮の密通の人物が対応関係にあることを指摘したことを指す。密通のなかだちをした女房についても、「柏木を女三宮のもとへ導いたのは小侍従、光源氏を藤壺に手引きしたのは王命婦であった」と対応を看取している。（『源氏の作者 紫式部』一五九〜一六〇ページ 新典社 一九八二年）。

(9) 他になかだちする女房と男女関係にあるものとしては、『我身にたどる姫君』の「この宮（＝女二の宮）の御めのと、大にの君とてむつまう候ふを、もとよりいみじうひかたらふなかなれば、夕やみのほどに（権中納言は）まぎれいり給へり」（巻四 一〇四ページ）がある。引用は、前掲注（5）鎌倉時代物語集成第七巻に拠る。

(10) 『和泉式部統集』の引用は『新編国歌大観』に拠り、その歌番号を示した。適宜、表記を改めたところがある。

(11) 鬚黒の大將が玉鬘を手に入れるにあたり、玉鬘付き女房である「弁のおもと」を「責め」（藤袴 三―三三四ページ 「せたむ」は責めさいなむこと）、彼女の働きで玉鬘を手に入れた鬚黒は、「石山の仏をも、弁のおもとをも、並べて頂かまほしう思」つ

た(真木柱 三―三四九ページ)。鬚黒と弁のおもとも男女関係にない。

- (12) 諸田龍美「(もののははれ)の淵源——「若紫」の密通と「鶯鶯伝」(「和漢比較文学」第四十号 二〇〇八年二月)は、「鶯鶯伝」と『伊勢物語』『源氏物語』を通観し、日本文学における密通は中唐の「鶯鶯伝」まで遡るとし、『源氏物語』にいたり「男女の恋情に関して中唐と同じ成熟の段階に達した」と述べる。ちなみに元稹の「鶯鶯伝」には、なかだちをする「紅娘」との男女関係を窺わせる記述はない。

- (13) 『うつほ物語』の引用は、室城秀之校注『うつほ物語 全』(おうふう 一九九五年)に拠り、巻名、ページを示した。必要に応じて()内に必要な語句を補い、場面把握の一助とした。ルビは適宜省略した。以下、同じ。

- (14) 新編日本古典文学全集『うつほ物語』第三巻、国譲上巻八八ページの頭注は、「ただし、仲忠が孫王の君を召人扱いしていたことは、明示されていなかった」とするが、本稿第三章の「かの大弐の甥だつ人語らひつきて」の蓬生の巻の用例からも、この嵯峨の院の巻の記述が男女関係にあったことを示していることは確実に読み取れる。

- (15) 齋木泰孝「平安時代物語文学における一つの型——仲媒の侍女・孫王、兵衛、侍従を中心にして——」(「安田女子大学紀要」No.8 一九七九年十二月)は、「兵衛が求婚者である男性の方に肩入れしたのはなぜであろうか。この物語には、実忠と兵衛との間柄について特に示されていないが、二人の間には何らかの係り合いがあったのではないかと想像される」とし、「かたらひつく」の検討から「孫王と同じような召人ではなかったかと想像される」と述べている。

- (16) 大輔の命婦のばあいは、源氏の詠歌に対して「いといたう馴れて独りごつ」(末摘花 一一三〇〇ページ)であって、源氏物語作中和歌一覧(新編日本古典文学全集第六巻)も指摘するように独詠歌と見なされるので除外した。

- (17) 柏木と男女関係にあった小侍従は、女三の宮から柏木への代詠「いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと」が一首あるのみ(若菜上 四―一四九―一五〇ページ)で、柏木との直接の贈答歌はない。

- (18) 阿部秋生『源氏物語研究序説』第二篇第二章「作者の環境」(東京大学出版会 一九五九年)。

- (19) 吉海直人は、「光源氏を例にすれば、葵の上付きの中納言の君・中務の君や、六条御息所付きの中將の君等があげられる。こ

いった女房名に召人的イメージが付与されている点にも留意すべきであろう」と指摘している。〔平安朝の乳母達——『源氏物語』への階梯——』一四三ページ、世界思想社、一九九五年）。また、侍従・右近という女房名について、「こういった女房の命名の中にも、過去の享受者達は乳母の伝統（古代性）を見ていたことが読み取れる」（同前一四六ページ）とする。稲賀敬二「夕顔の右近と宇治十帖の右近——作者の構想と読者の想像力——」（稲賀敬二コレクション）3 『源氏物語』とその享受資料 笠間書院、二〇〇七年所収）には、中将、中納言、中務などの錯綜する女房名と執筆・構想の関わりについて言及して興味深いが、葵の上付きの中納言の君や中務の君に関しては触れられていない。

（本学教授）